様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　２４年６月　８日現在

機関番号：２３３０２
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：平成 21 年～平成 23 年
課題番号：２１５９２７６７
研究課題名（和文）　外来科学療法を受けるがん患者の「生きる意味」への看護

研究課題名（英文）　The ‘Meaning of Life’ of Patients Undergoing Outpatient Chemotherapy

研究代表者
牧野　智恵（MAKINO TOMOE　　）
石川県立看護大学・看護学部・教授
研究者番号：６０１６１９９９

研究成果の概要（和文）：
PIL テスト(Purpose in life tests)日本語版の実施を通して、外来化学療法を受けているがん患者（以下「外来患者」）がどのような人生観、病気観、死生観を抱き治療を続けているのかを明らかにした。その結果、外来患者が、過去の人生を価値あるものと捉え、使命感をみいだしている一方、治療に制約された生活の中で、はつらつと感覚を味わっていない様子が伺えた。また、外来患者が、家族や自己の夢の実現のために治癒への希望を抱きながらも、病気や死の意味、過去や未来の人生の意味をそれぞれに見つめはじめている様子が窺えた。

研究成果の概要（英文）：
Through the implementation of the Japanese language version of PIL Tests (Purpose in Life Tests), this research sought to elucidate the views on life, sickness and death held by outpatient chemotherapy patients as they continue treatment. Outpatients considered their lives in the past to have had value and also had found a sense of purpose. On the other hand, a condition was seen in which outpatients were not feeling vigorous and healthy within their treatment-restricted daily lives. Additionally, it was observed that while outpatients held a desire for recovery in order to fulfil their own wishes and those of their families, they had also begun to consider the meanings of illness and death, as well as the meanings of their lives in the past and in the future.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
平成 21 年度	700,000	210,000	910,000
平成 22 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
平成 23 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総　計	2,500,000	750,000	3,250,000

研究分野：医歯薬学
科研費の分科・細目：7502
キーワード：外来化学寮法、生きる意味、がん患者、看護

１．研究開始当初の背景

全国のみならず石川県内における悪性新生物（以下「がん」）という）は、死亡原因の第一位を占めており、未だ増加の一途をたどっている。そのような中、がん対策基本計画導入に加え、医療法の改正に伴い、在院日数の短縮化や病院機能の分化がすすみ、さらに 2002 年の診療報酬で「外来化学療法加算」が制定されてからは、外来化学療法を受けながら日常生活を送るがんサバイバーが増加してきている。各病院では、外来でも安全に化学療法が実施できるように、さまざまシステム作りがされはじめている [1)]。しかし、患者が外来化学療法を継続して行くには、治療に伴う副作用のセルフコントロールが強いられるばかりでなく [2)3)]、治療そのものへの不安の他に、がんの再発や死への恐れ、症状への不安と毎日向き合わざるを得ない状況である [4)]。

一方、このような苦悩を抱きながらもがんと共に生きるという体験は、患者にとって脅威をもたらすばかりでなく、その体験をとおし、自己の環境との関係を再調整し適応する新しい態度を獲得する機会ともなる [5)]。この考えは、V.E.フランクルのいう「人間はいかなる状況下においても生きる意味を失うことはなく、逆に、その状況に対してその人がとる態度によって『避けることのできない苦悩』を『業績』へと転換できる」[6)]という考えと類似したものであると思われる。

そこで、このフランクルの考えに基づいて、1964 年にアメリカの J. クランパウによって考案された PIL テスト日本版（Purpose in Life Tests、以下「PIL」とする)を手がかりに、現在外来で通院加療しているがん患者への生き方（人生観）の再構築に向けた看護介入を検討したいと考えた。

２．研究の目的

1)PIL テスト(Purpose in life tests)日本語版（以下「PIL」）[7)]の実施を通して、外来化学療法を受けているがん患者（以下「外来患者」）がどのような人生観、病気観、死生観を抱き治療を続けているのかを明らかにする。

2)化学療法を継続しているがん患者に、PIL テスト(purpose in life tests)日本版（以下 PIL）による対話的介入が、がんサバイバーへのスピリチュアルケアを行う上で PIL テストがどのような役割を担いうるかについて検討する。

３．研究の方法

1）期間：平成 20 年 5 月～平成 23 年 5 月

2）研究対象:がんの告知を受け外来にて化学療法を受けている 20 歳から 75 歳までの患者で、約 30 分から 1 時間程度の対話が可能な人。

3）研究実施施設：A 県内のがん拠点病院で、本研究への同意が得られた施設。

4）データ収集および分析方法

(1)データ収集方法

①外来看護師長および看護師によって紹介された患者に、本研究の趣旨を文章と言葉で説明し、同意が得られた患者に PIL の実施をお願いいた。PIL への記入は PIL-A,B,C の順で実施していただき、PIL 実施後、患者には今後このような内容について話をしたいか否かについてのアンケートを実施する。

②PIL は 1 週間以内に分析し、その内容を患者本人に示しながら 2 回目の面接を実施する。2 回目の面接には、患者が自分の人生観について、イメージしやすいように、分析の結果を図にまとめたものを用い、それを手がかりに、過去、現在、未来の「人生観」について自由に語っていただく。

③患者との 2 回目の面接後、外来看護師と共にテストの結果見えてきた患者の人生観について話し合い、これまで看護師が抱いていた患者像との違いや、PIL 実施の感想について話していただく。

『PIL テスト日本版』は、PIL-A,B,C の 3 つの内容からなる。PIL -A は、全 20 項目の 7 段階評定法で回答を求める。信頼性（Cronbach'sα）は 0.896 と報告されている。PIL-B は、10 項目の文章完成法、PIL C は、自己実現に関する自由記載となっている [8)]。

⑵ PIL テストの分析

①PIL テストの分析は、「分析基準」に基づいて分析した。PIL-A(20 項目)は 7 段階尺度の回答をそのまま数量化(計 140 点)し分析･解釈した。PIL-B･C の自由記述は【人生に対する態度】【意味・目的意識】【実存的空虚】【態度価値】の 4 領域に分けて評定基準 9)をもとに数量化した。【人生に対する態度】は「過去受容度」「現在受容度」「未来受容度」「主体性」に関する 4 局面で各 7 点、計 28 点である。【意味・目的意識】は人生に対する「明確度」「統合度」「達成感」に関する 3 局面で各 7 点、計 21 点である。【実存的空虚】は人生に対する空虚感についての局面で 7 点。【態度価値】

は「死生観」「病気・苦悩観」「自殺感」についての３局面であり各 7 点、計 21 点である。

【倫理的配慮】石川県立看護大学倫理委員会の承認を得て、研究対象者に研究の趣旨、参加の拒否の自由、不利益のないこと、個人情報の保護、体調への配慮について文章と口頭にて説明し同意を得た

４．研究成果

結果

１）対象の属性

対象患者は 31 名。男性 5 名(平均 62 歳)、女性 26 名（平均 50 歳）であった。対象者の病名は、乳がん（13 名）、大腸がん（10 名）、子宮がん（３名）、肺がん（1 名）、その他（4 名）であった。

本介入効果のアンケートに協力いただいた外来化学療法室看護師は 4 名であった。

２）PIL-A,B,C の統計結果

PIL-A の平均は 100.2 点±20.8(T 値＝49.4±11.9）、PIL-B,C の平均は 57.5 点±10.8(T 値＝57.6±12.0）であった。PIL-A と PIL-B,C について対応のある t 検定を行ったところ、PIL-B･C が有意に高くなっていた(p＜0.001)。また、年齢と PIL -A,B,C の関係には有意な相関関係がみられた。PIL -A より PIL -B,C で結果が低下した 2 名の患者は、共に３０歳代の女性であり、５歳以下の子どもがいる女性であった。

PIL –B,C の記述を「分析基準」に基づいて分析した結果、【人生に対する態度の局面】は平均 21.9 点（±4.67)、【意味・目的意識と局面】は平均 16.2 点(±3.91)、【実存的空虚の局面】は平均 5.29 点（±1.13)、【態度活の局面】は平均 15.2 点（±3.01）であった。

３）PIL-B の記述内容の分析

PIL-B の記述内容を類似したカテゴリーに分類した結果を表 1 に示した。「　」は質問内容、＜　＞はカテゴリー名を示す（回答が多かったカテゴリー順)。

４）PIL テスト実施による患者の意見

PIL テストを実施した 18 名の方からアンケートに回答いただいた（表 2)。「これまでに、『これまでの人生』『これからの人生』などについて考えたり、誰かと話し合ったことがありましたか」について「はい」と回答したものは 10 名、「いいえ」と回答したものは 8 名であった。

また、PIL テストの実施を①「不愉快」と回答した者は、1 名であった（その対象者は、「病気の受け入れが良くなく早く治りたい」という状況であった)。②「これまでの人生を考えるきっかけになった」14 名、③「これからは、家族とも話したい」9 名、④「これからは看護師ともこのような内容について話したい」が 6 名、⑤「このような内容について誰かと話をしたかった」3 名「このような内容についてあまり他人と話をしたくない」2 名であった。

表1 PIL-Bの記述内容

質問内容	カテゴリー
私が何よりしたいことは…	＜旅行＞＜家族のために生きる＞＜趣味を生かして生きる＞＜仕事＞＜他者の役に立つことをする＞＜病気を治す＞＜ない＞
私の人生は…	＜幸せだった＞＜平凡＞＜病気以外は良かった＞＜受け入れられない＞＜わからない＞
私ができたらと思うことは…	＜以前の健康状態に戻りたい＞＜家族への責任を成し遂げること＞＜長生き＞＜仕事をする＞＜誰かのためにつくしたい＞＜よりよい自分になりたい＞＜人生のやり直し＞＜快楽の実現＞＜ない＞
私が今までに成し遂げたことは…	＜子育・家族のために生きたこと＞＜仕事・育児など他者のために生きた＞＜努力したものが「ある」＞＜特にない＞
私にとっての本当の望みは…	＜病気が治ること＞＜子どもや家族の幸せ＞＜夢の実現＞＜穏やかな死＞
私にとって絶望に感じることは…	＜病気の悪化＞＜自分以外の人や出来事の喪失＞＜ない＞
私の本当の目的は…	＜わからない＞＜家族の平和＞＜自分の夢の実現＞＜家族のために生きること＞＜生きぬくこと＞＜穏やかな死＞
私が退屈に感じるのは…	＜役割がないとき＞＜独りでいるとき＞＜ない＞＜体調が悪いとき＞
死は…	＜いずれくるもの＞＜怖い＞＜怖いが受け入れるしかない＞＜受け入れがたいもの＞＜怖くない＞
私が今成し遂げつつあるものは…	＜今成すべき役割（育児・趣味・仕事）＞＜分からない＞＜治療すること＞＜今を生きること＞＜家族への感謝＞＜死の準備＞
病気や苦しみは…	＜いやなこと＞＜仕方がない＞＜悪いことばかりではない＞
自殺を考えることは…	＜ない＞＜過去にあった＞＜今もある＞

表　2　　PILテスト実施後の患者へのアンケート結果

n=18

質問内容	回答者数（人）
Ｑ１．　これまでに、本テストで問われていた内容（「これまでの人生」「これからの人生」）などについて考えたり、誰かと話し合ったことがありましたか？	
①はい・・・	10
②いいえ・・・	8
Ｑ２．　PILテストを実施してどうでしたか（複数回答可）	
①とても不愉快だった・・・	1
②これまでの人生を考えるきっかけになった・・・	14
③このような内容についてあまり他人と話しをしたくない・・・	2
④これからは看護師ともこのような内容について話したい・・・	6
⑤これからは、家族とも話したい・・・	9
⑥このような内容について誰かと話しをしたかった・・・・	3

表3　　PILテストへの看護師の感想

カテゴリー	記述内容
＜PILをすることが心配＞	「初めの頃は、テストの内容に対して質問があったらどうして応えようか心配だった」「気持ちが落ち着いている人の方がいいと思った」
＜PIL前後で患者のイメージが変わった＞	「初めの頃は、テストの内容に対して質問があったらどうして応えようか心配だった」　「気持ちが落ち着いている人の方がいいと思った」「ご主人との関係を誤解していました」「なぜ最近元気に見えるのか分からなかった」
＜PILの情報を看護に活かせた＞	「テスト終了後、入院となったとき、テストで話していた、病気や死に対する思いについて共有できた」
＜外来での表情が気になっていた＞	「治療中の表情がどことなく気になっていた」「あまり話さない人なので、声をかけにくい人だった」「声をかけにくい人だった」「考え事をよくしている人だった」「病気を受け入れていないのかと思い声をかけられなかった」

５）PIL テストを試みた看護師の意見

PIL テスト実施後の看護師の感想は 4 カテゴリーに分類できた(表３)。テスト実施について初めの頃は、＜PIL をすることが心配＞であったが、回数を重ねるにつれて、＜外来

での表情が気になっていた＞患者に実施し、＜PIL 前後で患者のイメージが変わった＞＜PIL の情報を今後の看護に活かせた＞様子が窺えた。

考察

１）PIL テスト実施による患者への効果

今回、外来化学療法に通っている患者に PIL テストを実施した結果、PIL-A から PIL-B,C へとすすむうちにテストの点数が有意に上昇している。このことは、テストをすすめること自体がん患者に過去・現在・未来の人生に対して自己内省を生じさせ、それらの人生の意味を自ら出しはじめていることを示していると考えられる。

しかし､2 名の対象者が PIL-A より PIL-B,C に点数の低下がみられていた。この 2 名の特徴は､5 歳以下の幼児のいる 30 歳代の女性という共通点があった｡PIL-B の記述には｢娘が、小学校、中学校、高校、大学と行くことをすべて準備してあげたい｣｢できれば病気の前の自分に戻りたい｣｢私の人生は、まだこれからのはず｣と幼いわが子にまだまだやりたいことがあり、命を奪うかもしれない「がん」という病気をまだ受け入れられない状況であった。また＜態度価値＞では、「死は考えないようにしている」「死は怖い」などと死や病気を受容できていないという特徴がみられた。しかし、PIL-C の中で、「子どもとの時間を大切に思うようになった」「このテストで人生を考える機会になった」と記述されており、彼女たちもテスト全体としては点数が下降していたものの、テストをすすめるうちに自己の人生や生きる意味について見つめ直し、今やるべきことに目を向け始めている様子が窺えた。

2）看護実践への効果

テストを依頼した初めの頃は、看護師もテスト内容が「死」「苦しみ」「これからの人生」などといった、日頃患者とは避けがちなことばの内容が多かったせいか、「テストをすることが心配」との言葉がよく聞かれた。しかし、テストの結果を研究者と共に話し合ったり、患者との 2 回目の面接の結果を話し合う中で、治療結果が思わしくない患者も、その事実を彼らなりに受けとめ、これからの人生をしっかり見つめようとしている事実が分かり、少しずつテストを実施することの違和感がなくなっていったようであった。その結果、後半では、「テスト前後で患者のイメージが変わった」「テストの情報を今後の看護に活かせた」「外来での表情が気になっていたのでテストをすすめた」との意見が多く出てきたのだと思われる。

テスト実施によって、外来化学療法での看護実践にも役に立っている様子が窺えた。

結論

今回 2 年間にわたり、外来化学療法を受ける患者に PIL テストを実施することを通して、以下の効果が明らかになった。

１）外来化学療法に通っている患者は、PIL テストをとおして、これまでの人生やこれからの人生について自己内省するきっかけとなっていた。

２）PIL は、外来化学療法で働く看護師にとって、多忙な業務の中でも、患者の病気観や死生観、今後の人生観について先入観なくありのままに理解するための大きなきっかけとなるツールとなっていた。

以上のことから、外来化学療法の場において PIL テストを実施することは、患者への自己内省を促すだけでなく、多忙な看護師にとって患者の死生観・人生観をより正確に理解する上で役に立ち、がん患者の人生やこれからの人生の「生きる意味」をよび覚ます支援の一助となると考えられる。

研究の課題

外来で PIL テストを取り入れやすくするために、導入方法の工夫や質問内容のより簡素化について検討を行う必要がある。また、今後は対象者を増やすと共に､PIL-A と PIL-B,C の関係、さらに、インタビューの内容を分析し、外来化学療法を受けている人の「人生観」の特徴についても検討していきたい。

引用・参考文献

1) 山田みつき著；がん化学療法における地位との連携、がん看護、Vol.14(5),pp.580-585(2009)
2) 齊田菜穂子、森山美知子著：外来で科学療法を受ける患者が知覚している苦痛、日本がん看護学会誌、Vol.23(1)、53-59(2009).
3) 光井綾子、山内栄子、陶山啓子著：｢外来科学療法を受けている患者の QOL に影響を及ぼす要因｣、日本がん看護学会誌、Vol.22(2)、13-21(2009).
4) 瀬山留加、神田清子著：化学療法を受けながら転移や憎悪を体験したがん患者の治療継続過程における情緒的反応と看護支援の検討、日本がん看護学会誌、Vol.21(1)、31-38(2007).
5) Tamura K, Kikui K, Watanabe M,：Caring for the spiritual pain of patients with advanced cancer; a phenomenological approach to the lived experience. Palliat

Support Care, 4,189-196(2006)
6) V.E.Frank, The Will to Meaning -Foundations and Applications of Logotherapy, New American Library, New York, ,p.ⅸl(1969).
7) V.E.フランクル原案 J.C.クランバウ･L.T.マホーリック著/ 岡堂哲雄監修、PIL 研究会翻訳；(株)システムパプリカ
8) 佐藤文子監修;[改訂版]PILテストハンドブック(Ⅰ部～Ⅳ部)、システムパプリカ(2008年).
9) 佐藤文子監修;[改訂版]PILテストハンドブック別巻、システムパプリカ(2008年).

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）
牧野智恵、病を生きる人間の価値実現に関する考察　－V.E.フランクル理論における「3つの価値」に焦点を当ててー、石川看護雑誌、査読有、9巻、2012年、PP.141-150

牧野智恵、V.E.フランクル理論における病の中の苦悩の意味の検討　－「意味への意志」に焦点を当ててー、石川看護雑誌、8巻、2011年、PP.117-126

加藤亜妃子・牧野智恵・岩城直子、医療者が認識するがん患者の在宅緩和ケアに関する課題、石川看護雑誌、8巻、2011年、PP.83-92

〔学会発表〕（計５件）
TOMOE MAKINO・NAOKO IWAKI, The ‘Meaning of Life’ of Patients Undergoing Outpatient Chemotherapy: from the Analysis of PIL Tests, 17thICCN,2012.9.13（予定）,Prague

岩城直子・牧野智恵・加藤亜妃子他 2 名、外来で化学療法を受ける患者の「生きる意味」(第１報)　－PILテストB.Cの分析から、第25回日本がん看護学会学術集会、2011年2月7日、神戸国際会議場

牧野智恵・岩城直子・洞内志湖他２名、外来で化学療法を受ける患者の「生きる意味」（第２報）　－PILテストB.Cの分析から、第25回日本がん看護学会学術集会、2011年2月7日、神戸国際会議場

６．研究組織
(1)研究代表者
牧野智恵（MAKINO TOMOE）
石川県立看護大学・看護学部・教授
研究者番号：60161999
(2)研究分担者
岩城直子（IWAKI NAOKO）
石川県立看護大学・看護学部・講師
研究者番号：60468220
研究分担者
加藤亜妃子（KATOU AKIKO）
石川県立看護大学・看護学部・助教
研究者番号：30553234
研究分担者
洞内志湖（HORANAI YUKIKO）
石川県立看護大学・看護学部・助教
研究者番号：30423833
研究分担者
木村久恵（KIMURA HISAE）
石川県立看護大学・看護学部・助教
研究者番号：90347360